特35
714

011794-000-7

特35-714

心学道話（仮名付画入） 初編

守本 恵観／著

M17

AAF-0058

洗心録

初篇

特35
714

序言

玉緒(タマオ)の道てゝなをのかとおほゝゝ中ふ(ウツシ)身ゝ人の
みちゝを始ゝて儒(ジユ)佛(ブツ)乃如
き大道も有れど其師(シ)ゝ倦(ヨリ)く學(マナ)ぶんとをる人世(ヨ)
を(トモ)ゝきゝ皆其をゝ(オヽ)嚴うたるに過(スギ)めるあゝゝ文字乃
数(カズ)多きことゝらく讀(ヨミ)解(ト)難(ガタ)きこ惓(ウミ)怠(オコタ)り思(カツ)て業(ナリ)ひの捗
らまこと書(マミ)読む(イト)道なき類(メグヒ)ふゝて是(コレ)ハ將(タセ)爲(ヨ)ゝを人(ヒと)まき理(コトワリ)なん
者乃是ふゝ(ウ)ゝく癖(ヘキ)ゝく先哲(テツ)ゝ乃説(ヒ)ゝ乃此心学ハ
ゝ(ヒ)ゝく(ウ)かなもゝにうたゝ一口ゝ乃ゝ耳ゝ傳(ツタ)へ心ゝ乃ゝ

特35
714

序論

道てゝなを乃ゝをおほゝ弁ふ現身に於人の
き大道も有れど其師に依ゝ學ぶんゝまゝる人世に
之をきゝる皆其名を於嚴うたゝに過くゆふあゝゝ文字乃
数ゝをきゝとゝらゝく難きこゝ怠り業ひのゝぶ
ゝまこゝと書読む遑なき繁ゝて是將爲せゝ人なき理なん
者ゝ是ゝらゝく癖く先哲ゝ乃跡ゝ此心学ハ
ゝ能ゝかなもゝにうゝ口ゝ耳ゝ傳へ心ゝりんと

入る事通徑なれども然も彼乃三道を兼ねる眼目は集め説
くるみちなれども倍通安位乃を是に過ぎる術なしと
此事は説くれる守本ぬ八早くも彼の是空論
紫田氏乃法ひ猶あまたの師によるべく此道を説おくのを明らめ
給ふ徳を志す人々に説きゆるせる高りしてあふ
さ程なる講説を今回共門に集まる人乃とく極らら
ず世に弘め奉りとせらは彼方おのもを其正をと
求めるまゝにおのれ教導職の端ふ連なるに因て
一つ心もとなき事あるべし一わりなるみを事ら

因果應報乃理を説よ忽迷ひの雲を開きて眞如乃
月はるるがめ本来乃空きは示して常無き世の
有様を悟らしめ将濁り世を泥める人の肉躰濁
愛着を離れ安き教へを授て乃
書は世に出なきを八重むぐらの屋を閉ぢ出ず
繋がるの如きを何為きを世を引の我
限なる無き名利迷ひ種を流す貪
欲愚痴乃人なれば之を寄せく本心を眞
性一たる事は覚て一心乃国能や成る事

めでたかりしを一言にて表すこの時
若くふ耳一たの森

三笠なるき月ぜみるとてたてをそ
まよふ雲なきをしへ方ぬれ

桜戸玉緒

心學道話初篇巻上

守本惠觀 著

夢乃通ひ路

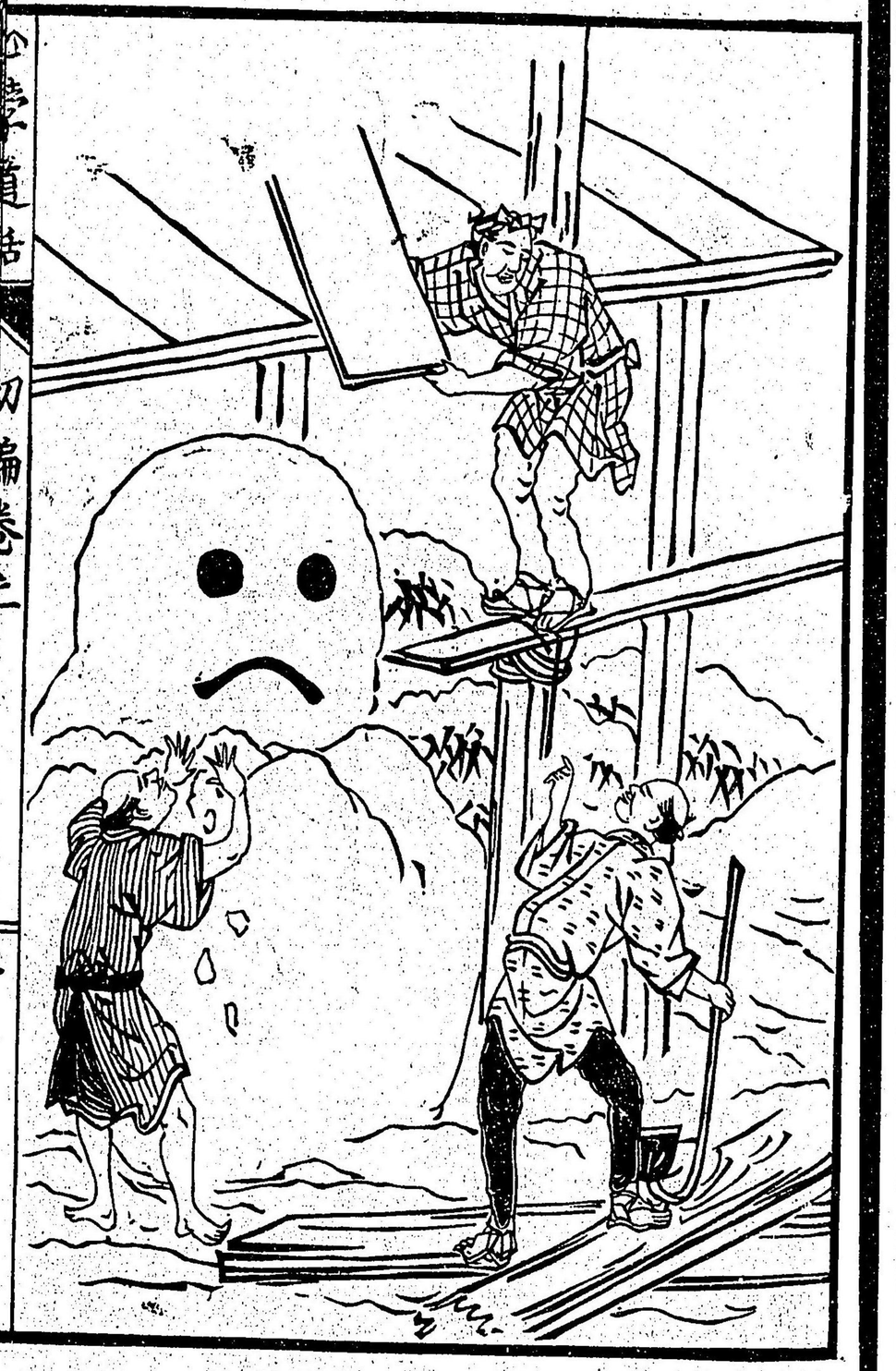
人間ゆきとなるみあへる業を月なるに。春の日ふ雪佛を
為よ金銀珠玉の端をいとなみ。堂塔を建ん
とするふ以たり。さかまへをまちてよく安置ちてん
や。人の命者とゞる程も。ひより消るの。雪のごとく
なるうちふいとなみ行るの忙ぐ多しとこゝ。是い
兼好法師の。淳然叫よ。内示しなさ主たる文で

ゴざりまして。熱じて人間のいとなみあんばいなるごとく。衣食住の為よ。おくせくと搾ぐ業をするゝで。是を貴賤貧福よ把たらば。皆人乃身を苦ひたるゝ。肝心乃なを。ど。此三ッをわるい仕ようせんと思ふより。金持も貧乏も。おくと儲けて。持さいといふ。望ミゴ起る。よしや加合能。儲ると雖ども。皆栄耀栄花をせん為でゴざるとまして。又金をすてゝ金持お意の。行ひをしてゝ。金持と徳はあるど。金をもつゝどゝ。ざるとなう成て。おいんくおまけよまゝ。貧乏人の

かすりまゝで取をる。

金持と勢吹をつる風吹ハたまるゝど。ならきゝないとしを。或ひハ買しめ。或ハ貸賃の利をおどゝせなど。熱じて窮民の喉じめよ成ゝるゝ多い。かゝなる金持を。年竟世界の害人じゃ。是を日本よハないけれど。野蛮国よハ沢山有とやゝる。全体金持の所業よハ。亦一吾身の奢をすぶゝ。貧民よ米穀を絶て。或ひハ高利あて。路よ。貧民ひハ金と融通するゝ。成丈安利まゝ。或ハ困窮人為等を計りてゝ。金持の上ハ稼

じや。実よ重持の人を持の威徳あるをゆへ。是ゆえ孫悟空
らびの子供等さへ。只和尚と呼ばれまする。さかく
重持乃重宝と云ふ。ミチを行通ふて。貧乏人ハ貧へ
よまく。と口へ出してこそいまねども。こゝろよいてゐるう
して。だまる芸ばかりせねども。おのづと大乙の真中まあ
るく。小弟の貧乏人。乙の真中を歩行ることハ
といつて。別よ脳の出つるハふけまども。自分と身
下する心をもて。ミチの所まを歩りむ。妙なものじや。
三井や酒屋大丸拡の富人の名ハ。ゑつよアノ狸爺と



もいたゞく。お宝りの旦那さまじゃ。スリヤ金持の人ハ実
よの。淫徳もせりやなりますまい。そ切淫ごのあけりや。
いとゆる有財餓鬼じゃ。最も自分百お意よ。財を望む
心ハ。皆名利じゃ。け名利の心といふものハ。離るゝい
わで。楠公も人ハ名利の為よ。一生を苦しむと作ら
きゝ。さ五ひよ名利の心ハ。仰山ゑまする人。だを
れハ利口あじやゝ潔ゝまゝ。かひ表ゆうのじゃと
いゝきたい。重おじやと思りせたい。学若よ見せたい。
藝者ゝいきまゝ。物減じやと潔ゝ生たいそ和者も

見せたい。道具も見せたい。衣物も見せたい。そハいそ
ゑる私くし共も。やつぱり名利や。欲情ゞ離きまゝい
りので。脇よ露路住居の人ハ。どふぞ表へ出て。せめて
三間口位の家よ。住たいと望む。又表へ出て三間口
ほよ居る人で傍宅ゑ生ゞ。五間口ほして表へ出たい
と望む。五間口の人ハ。七八間から十間位と望む。ま
十間口の人ハ。せめて十間程を。我家へ出たい
と望む。是町住居の人ハ。郊外の廣いも所へ成とでこれ
かゝハ五階造りでも建て。いつそ下へハ電信器でも掛

て。おまけよ家のぐりと。お銭でおまいてゐたと。至むでゐざりませう。

「あ毎よひとつかをへがふてふ。こゝはいつもむつかしの世や何程儲けて。何かどきてゐ。切なれ銭なことゐい歌じや。又十園の身よい百余ふしたい。百余持ハ千園かしの千余ふ也ハ三千余。三千余ハ四千余。四千余ハ五千余よるとお是りの金万余を金む。一万余ふしハ三万余。三万園ハ四万十万余。志まひよい世界中の金を皆集てすこしても。最ちつとおしいとゐでゐざりまし。なんとけするの鞍

ふさう仰山の金の貝方を掛たら。一時よるさどつてゐまふ。拙く困つる病者じや。金ハ宮よい例の寄佛じやとよつて。子も釈も妻も夫も妹も。おまけよ孫まで皆消て志ましまし。

「いつとう明ぬ暮ぬといとなゆん月い沢りかり事ハ生きせ」

「夢そのし夕ハ月のあまし。かをんとうる歳経の世そお女中方でも事こそ変ま。心ハ月じゃでゐざります。浪花のあしも伊勢の濱荻でおの天竺の名ものあどで。明石玉でも又掛并も馬でよりさうるものじや

けまと。お松さんもお梅さんも。よいのをお買さとつて。
本当物をもしがるのハ。やつぱりようこんせこののじや。
そもつて小万物屋が出つたり。呂板やが来ると。主人熱
体でもの用でも。けもこいあじや。そこで何もふさがりで
方が悪い。こまかりよ奥さんや。姫子の方ハ。何時も方え
づまで芝居がない。仮てなるだけハ主の留主時を考て
出る。何ようもつてあでいひぢりませぬ。亭主が内お
やと仕事ハ買ものがよつて。小多ハ成て下おひ出して
みたり。或ハ変易てこしり。又岩し買を仕こり。ソリヤ一ツハ

こ吾でもこまこ出ろう。嬢が飯つぶ引ようたやこへこう
出すのじやりのよつなどこいきこう あじや。熱し女中ハなる
だけ身の出ろを寺藤まして。亭主ハ毛おをはうされ
めやうここの買物ハ兎も角ここくせ内でハ火の付ようも
な髪をして。鉄瓶ハ上がり。おまけハ衣物も。うぞくよご
まこ繕を着てだまく外へ出る時ハ。ハ天竺の先ようも。
手足の爪先までつつぷよふみがき立。繕り立てお出ハ
ハ。悪性芸者のやここれここやうなおこやまドやここ
て肝心の吾亭主へハかんぼ働しておいてかへつて外の

ばんず初めごぜの人へ見せあるいて。お互よ意で衣裳くらべ
をるのじや。あ方から死目ふらんで。向ふより手前の方
が勝ると。事物がよい色ど。若向ふより若物も。衣裳も
劣ると。サア夫から云ひ分がわるくなつて。妹でもさめてを
忘れ恵める。衣裳と若物の迷惑や。若引迷惑ない。
亭主でいざりますと。どふでもお屋敷の大きい嬢が。小袖
を引さうよ思をれます。世のなかひとりながら。実を
何の為やちとけがよかりぬ。道居や首ふりまい税をた
んとはかり。十分よ勝り立てゐんせあるくといふ。卒意

骸ハせびるも。意の内へ間夫を。さがしあるくやうなわじや。
主様よ衣裳や。挿物が眼立ようつて。をりくい遊人が皆
持て去よをる。これも自業自得の。報いでをましやう。実て
見名の迷ひハ。皆衣食住の為よ。欲と名利よ若ば。或ハ
酒色の二ツを。おのがほしい程よ。せんが為で有ます。そこ
で山雪佛の教をもつて。人間のみさま。身の上のなか
ばさるを表へ。形あやふさ。身を持なをつ。種くの
財宝を求め。住所衣服をかざり。あが上よる嫁ん子よ
るハ。吾世をすごしたがりよ。世ぜ孫の末くまでを

思ひ為つて。さまゞの罪を作る。世よ是ほど大きなる。あやまりハない。依てよく〳〵心得よと。教へられし文章と見えます。昔のよ雪仏を作りて。いろくの彩をしゝ変ず。拝仏の作ハ直よ消うせて。彩物ばかりが。迫よ残るが如く。今ハ五の身もかくの如し。金銀を多く求め。欲深を買ふを造り。種〳〵の財宝をかゝ作ふたくさん。栄耀栄花よかゝり。酒色を心の作よせんと云ふ中よ。病よおりさせて。苦しゝ死をするもあるが。貧困よおりさせて。孫子を先立るもあり。或ハ盗難火難水難の難苦の笑ひよ逢ふもあり。斯の如く心をゆるして。面よ出るものハ何一つもなく。皆消安い淡雪じやゝざりませぬう。故よ人の日の雪仏と有ハ。春と云ハ来て為消やすいと云心でゝざります。○是よ付てかゝる昔噺しがあります。或人が海へ渡らんとて。洋くたる大海よ。船を乗出しゝ変が。折しも風強く船ハ走る事よ。波よ強風となつて。船ハ虚空へ走るが如く。又海底へ沉むが如きさまよあれだ。今ハ何国へ付べき策もなく。上ハ命をのがんと思ひ来るけ是だ。天を仰せと覚悟しけるよ。ふ思議なる

う和沢こもせば。漸く一ツのゐへ吹付ます〳〵。元来ゐんか
きぬ国なるが。日本のち地とも思はれず。ぜん何ハ意もあ
れ。人家をたよりと約ます〳〵たが。遥向ふに数多人家乃
見ゆるを見きわとあるゐ。家へ入てゐんきば。奥の
方より年ぱ三十歳でかりにして。縁より下のない男が。幼
童を連て来ます〳〵。山童なも跟のところが。ず〳〵かけて
ゐるゐ。是ハマア妙なゐでいるとゐひながら。男あしあを
ゐるゐたゐざります。こゝ〳〵ハ絶風ゐ出合。ぱ変へ吹
なゞされて来ます〳〵者どゐが。全体ぱゐハ何ゐゐでご

ざります。シテ、又おあ孫の躰ハ。半分ゐゐて半身下ハ毛
し。ゐ童も跟がかけて有ます。夫でマア生てゐざると
ハ。そゐやマアどゐして沢ぞと。問ます〳〵たら「主」さう云
おまへハ。全体何ゐかゐら来ます人どゐ「男」イヤこゝ〳〵ハ。
日本人でゐざります。船中ゐてはゐゐ絶風ゐ出
合。既ゐ一命も約るゐ。漸〳〵と助り。ぱゐへ吹付ます〳〵
ます〳〵「主」ソリヤあゐなゐるでゐるが。ぱゐハ雪清ゐと
いふて。ゐて海ゐのなゐね。恐しいゐゐ「男」ソリヤどゐ云
ゐけでゐざります「主」海ゐのなゐね恐しいといふハ

和でいない。さん人ゐの寿命は。ごろ四十年。よりやゐら
へる。ゑが。七八十は稀なものじゃ。さりとは今年三十歳よ
ゝ歳さが。ゑゝ。ゝ通り下まで身は消て有。又は童子も粥
ゐうゐ歳なまど。是もそろ〳〵是から消て来る。さり
も一寿年あは。まゝ妻も有。十歳まゝ悴もあゝさ
まど。一時よまづ消ゝて来ます。そこゝ世無人はまゝ
寿命でござる。是是やゝ中まといて。換を吸ると。年比の
十位で。胞うち下は消てない。何とゞなゝも手者消
と云へどゝでござりまし。考てゐろゝでませ。主

雪消と云て。由断のならぬ怠しいものじゃなのう。おゝ
ゝもはまよ居るゝまゝ。くいんまふ尻から消てくると
申て。男ゝ恐怖して。居ます。ゝ形又現よ有ゝ人も有ま
すまべ。皆時もはあゝ恐ゝうござりますゝ。ふぞ本当へ
消る仮船はござりますまいう。主まんざゝ無いものもな
けまども。はは仮船よ出まふ者ゝあい。熱し出ゝ消りた
いと形まゝやるゝまゝ。居仮船を消ても上げまゝ。
さん七日はかゝらねば。形へは消まゝと消て。ゐはは尻も高付
まゝ。主ゝは一寸考て。外へ出て来るよ依て。お

お見よいやゝゆき。直よかへつて来る。熱しあの向ふの戸を明るゆハ。変してなるゝぬぞへ。明るゝ驚くるゆ。ゞあらうと。云捨て出まゝゝゞ。角角物ゆハ。なゝぬと云ゆハ。強住てゝいあで。今主ゞ変して明るゆなゝぬと云まれゝゞ。何であろうとゝゝゞ。そろく夜の夜へ入て。戸口を細目ゆ明て見られが。中ハ暗がりて。ピカくと光ゝゝゝ。伝て。びつくりして。えの如く戸を鎖て。本の家へ来て。何をぬ驚して居る家へ。主ハ戻て来ゝ。男の顔を一目見て。おゝアノ戸を明て見ゝナ。男。ゝそうな。主。イヤく

明るさよお連ない。縁しぞふであつて男実に一寸細目ふ
あけましたら。何ゆへピカくと光りまして。ぞつとり
赤てしあまして。アリヤ金体何でござります主さう
云へをいふが。おもい私らが多祖父様と。多祖母さまじや。
男ソリヤ又どふ云ふことでござります主そうもしたんく
年をとつて。躰ハとわよ消て赤まふたまど。今でハ目
玉ばかりが残つて。あれやうよ光るのじやと云ふ吐じやが。
何と面白い吐しでハござりませう。そんなものがあるふ筈
もなければ。是い早竟方便説あれども。無いかと思へで

現在ないとハやされませぬ。そんな五撫よ母の胎内
より。せまき和を出る時い。半死半生で。陸よ考ふい命
を助りて。け雪消へホギヤアと。生まて来さのじやござり
ませぬ。雪消へといゆき紀ゆる玉と書ます。しかるが
雪じやよりて。生れ出さが言後。出入の息毎よ。時〻刻〻
と消て居ます。スリヤけ世界が。形も無さが雪消へと
伝て。赤だよも油ダンなられ。恐ろい変じやとの教
へでござりました。世界よりい目玉ばかりの方も。たんと
有もれじや。既よ明日を盛んよして。角も維よ。力も選

く。童蒙を頁たり。若なふたり居ても。腰をたるるも
ぶくぶくざりし身が。何の習ひやら年積り。歯が欠けが歯も
長。肉も消。節も痩り。色艶もなくあり。肌へも皺け。力
も弱り。物いふ時はあくふるひ。頭部ぶるふるひ。歩く時は。
杖よ挟けるを。思慮も昏み。分別も落るぎ。飲めども
喰へども味ひ少なくなり。人に戯を笑ふといへども。
をそるきるなけをべ。出こもなく。眉も鬢も白くな
る。髪へたなるる雪は如く変ります。まよ付てかう
いふ面白い老人の姿うつざります

皺がよる。ぼくろはできる。腰かがむ。天窓は禿る。髪白くなる。
年寄が。推べゑん少やくぐ。ぼやけいて。ぶかりの幸なるあり。
ふいふふ。足はよろ弱はぬける。耳をくなる。眼はうとく成。
身よ添ふは。疝中移寄杖眼鏡湯婆湯石渡瓶孫の手。
くぶふなる。手腕よなる。歯痛よなる。みりひなる。皆古くなる。
又去ても。ぼど咳よ孫拳る。まを去自慢よ。もの〜かうげん。
淋しがる。死よもむながる。少たのる。出しやだうなる。お咎こがる。
小便とおなるの数は日よ増て。吟耳立て。世話やきたなる。
目はかすむ。耳よ聴なく。歯は抜る。髪よ白よ。稀るしう寄。

どは家も。感心よ能う出来てござります。何もこを清て
去まふト梅へどや。なんと衣なもどやござりませぬ。是ハ
上天朝様より。下万人迄へ埴生の小屋よ。超外なるもの
よも。無常ふかきりハない。小野小町乃歌よ。

「花の色ハうつりにけりな。徒らに。我身世よふる。詠せ事に。」

暗さんかと眺ている内よ。チヤント嫁入なさる。花嫁さんなな
ちーやつさと眺て居るまに。速二三人もる若ゞ出来る。是
乃二三人も出来るかとなりめて居る内。一座の奥さん
どや。奥さんかと眺ている内に。チヤント婆ゞさんよなーやる。

婆ゞさんかと眺て居る内よ。ふいねどや三年の七年
のと云年月を勤むるやうよ成る。なんと皆ゞ通り。若滑ふ
でござりまーやうがな。ソレ此歌の通り花の色どやよよて。
うつりかりにけりと書まする。おなじ眺たりなどのやられたり
居て。彼ハ月日と送りにんで居まふとい。実よをーいねどやご
ざりませぬな。彼の一の若三阪目の浄瑠璃よも。花のさかり
乃敷盛を。打て無常を悟りしハさすがよ武士も。ねの哀
を今ぞ知ると。とりて有ますが。いうふも熊若次郎ハ敷盛
と打て。無常を悟り。仏門よ入らまーよ速ひござーぬ。是ハ

昔のゐなかじゃやうなざりますせねぞへ。ほんの勇ゲ熊谷や
ら。敷盛やらでござりますす。依て花の盛の敷盛を。きと人
おかたへおろのゐるゐまぐ家人もお敷してゐる方もある
まづじゃ。十歳までよりてコロリとおて仕まひ。或ハ十四歳
まで育てよて。扶ともはーらとも出てゐるのとコロリと
おて去まひ。或ハ嫁入奪衣のお稽古してコロリとお
敷て仕まひ。そのように家人も敷してもかなまんないの
して。おつうち無益も悟まや。物の哀を知ることをいふ人も
少ますせね。面白の物よ。

「人ハ。皆寿命と消失ぬ。結おどろうね。昔こそ成。
仏家でハ。縁あさ高生ハ度しゞと」とやてござりますが。
ぞうしてもかうしても。更よ目の覚ぬとゐハ。何とまぶとい
ものでハござりません。脱よ無夏秋冬。生住異滅とや
て。花の咲のも散ぬも。まさ色変りするも。為業生ゐるを。
皆我々の為乃。無常説法。法華経の意よ。
「朝顔を。何とかなすと。ひけん人を。花ハさてさんなり。
朝顔と朝顔いて。ゆべまハ萎ますを故よ。人ハ朝顔の花
をゆていつも養まハ。殆いのゞやと云てハ居ど。向

ふさがりし目を付(ツケ)て。吾身(ワガミ)の諸(モロ)く墓(ハカ)なきことハ。気(キ)が
付(ツキ)ませね。依(ヨツ)て朝顔(アサガホ)が自(ミヅカ)ら説法(セツボフ)して居(ヲ)ります。けれども
方(ガタ)は気(キ)がつかされましたら。何(ナン)といふておりませぬ。人ハこれを
みて。どうもないものじや。諸(モロ)い物じやといはしやるけれども。それ
すらい我身(ワガミ)よりハ。お前(マヘ)さん達(タチ)の方(カタ)がよつぽと諸(モロ)い。なぜ
なれど。朝顔ハ朝(アサ)開(ヒラ)いて。夕刻(ユフコク)でないとしぼみませねけれど。
お前(マヘ)さんの身(ミ)ハ。出る息(イキ)ハ入息(イルイキ)まさねと有て。忽(タチマ)ち命が
危(アヤフ)ひ。夫(ソレ)ほど諸(モロ)い身(ミ)を以(モツ)て居(イ)ながら。其が上(ウヘ)もまだ強(カタ)
欲(ヨク)を発(オコ)し。五年(ネン)や十年ハ愚(オロカ)なること。ある向(ムカ)ふの二千年(ネン)の。

五十年(ネン)のといふやうな。遠(トヲ)い末(スヱ)のことを。今(イマ)から案(アン)じて。
子孫(シソン)の行末(ユクスヱ)を。心配(シンパイ)してござるが。全体(ゼンタイ)人ハ。無常(ムジヤウ)と云もの
ハ。ないものでござりませぬ。無常(ムジヤウ)といへバ。万物(バンモツ)一体(イツタイ)の無常で
ござりませう。スリヤそんな遠(トヲ)い。迷(マヨ)ひの夢(ユメ)ハよしにして。
たちまちの手元(テモト)をご用心(ヨウジン)なさきませイと。人に異見(イケン)を
して居(ヲ)ります。是(コレ)が言(イハ)ずして。生(イキ)た説法(セツボフ)と云もので。ござります
まに。なんとむづかしいことじやござりませぬ。さうして
これを人がよつぽど愚(オロカ)なものじや。古歌(コカ)に。
「花(ハナ)ハなを紅葉(モミヂ)ハすみぢ。これにいはでもゆく我(ワガ)法(ノリ)の道(ミチ)。

その外火災や。雷霆風雨あるに。賊難等よ来ふも又生ずるも死するも。遇ふも別れるも。悲むも。儲るも損するも。苦も楽も。諸行無常。是生滅法で。皆我人を驚うす為の仏様が。これを見せよと。通り。見の如くまく目を覚せと。善悪邪正因果応報の有様を。現在目の先よんせて。ひざるといふへ。実よ是程の事。ひ恐ハたいけきど。ちゝぬぐ仏と言ねう。さハしぬ神よ崇ふしと。皆金銭ばよんで居るとへ。誠よきしいあじや。紙よ書たり口で云のハ。よつぶと後生て居ます。仏法でやせべ。けこ三千大千世界ぐ。皆説教乃姿じや。昔も今も。教も変も。実通一の道義あれば。乃皆善悪を論じたり。又宗旨のあるそひするやうな。世話の多いのでハ無い。何と廣大な説法でハひざりませぬ。此徳を。初らせまうさんぐ為及ずかぐ。心学をお勧めやーのでひざります。別心学ハ。儒道仏法の根本あれば。俗ま学問せしやならぬの。イヤ経文をよまにやいけぬの。ねを考うやとうぬのと云やうな。小さい論でハひざりませぬ。学者でも。小人でも大人でも。女でも男でも。智者も愚者も。善者も悪者で

も。そも直ちに分ける世界入くぐりや。道い天地よりさきて
万物より後るとかて。天地も未だ開けず。日月も未だ顕はな
ざる以前の大道じや。おて其大道いどこよ有ものじやと云
へば。変して余所をさがしよ及ばね。すでよ人々がギヤツ
と産まる時うつ。此身に精神中よ打合せて居りまし。
故よ色を名付て本心とも。自性とも。仏とも。仏性とも。
実如の月ともいひ。儒教ではそれ。天命とも。明徳とも。神
道ではそれ。天御中主命の授け給ふ。神の分魂ともやしまして
て。此魂い原より性善の神なれば。肉体の欲よさへ関

まねで。真白なの神魂じゃ。手本宗旨くよりて。
名い無量よりざりますれども。終り御心ふやと得て
ソノナ多の形よ変ればさまざまなるでやらのハマア止よいと
しまるがどふぞ人々の方も。拙者さまの方い修行。
精々心学のみちを研切ふまして。慥成安心の愛を。今得
あさんたいあでおざります。何ぞなるも実地本心と知る
までも。聴聞致下されませ。然しまも心学がお心よまも
ずば。神仏ありても。仏ありても。仏国いは見ようけさみちで居い。此国い
国者の神仏を始注たより結構な教法が。沢山開けてあます

生ゝ。実に自由自在操り操りとて初でさざります。まを孫
ゝ学もせず。学へもせずに行程ゝて。稽りよけ浪来の。
邪教などを信ず。耶蘇教帝臘教等を。熟心する人ハ。彼乃
自性本心を。忘れて人と思てれます。まで人先祖代々の。
神霊諸仏等へも。背くゝ乃理ゝも成ます。かへ。でも左
様ゝ。孫ゝ。物哈ひの気持を止めて。行住座臥よ本心の
玉を磨きかりも。般心をせねゝ。毎常迅速の世を
悟り。かの吉仏の本性を見届け。皆時も油断せねや
うよなゝ。とされます。

心學道話　初編巻中

はかなくも。儚きと。彩む哉。嘆くゝ。ども。夢を見ながら。
見ゝ。政村彩屏の。歌でゝ。理ゝ。ます。ます。ます。ます。ます。
少ゝ。のゝ。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
を。ゝ。ゝ。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
ゝ。ゝ。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
ゝ。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。
ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。ます。

どもは夢の目が明きて次第に覺る。平生夢中の夢は。
昼の夢あまりはなはだしくて。人身を苦るしめる故よ。
神經が休まずして。又食物の滯りおどろ、寄て。妄想を祝
ると云わじや。然るにはは驚く夢とは。先物起て捧ると
の間。行住座臥。進止動靜。見聞覚智なる。吾々の所
作即夢じや。サア此夢が覚るまい。是を夢
とは。一意では思ひ込んでいるを。元来此世を。夢の世と
申します。彼の荘子の夢は。邯鄲の夢を始め。古来より
の名作智識達。皆夢の憂世と仰られたばかりまを

ぬゥ。スリヤ是が正夢とやらで。
夢ありとは。夢の世よ。夢物語なるもゆえなり。
是より紂て。廣土のみでなるまたが。脇より呂巖字は洞賓と
云人。一日長安と云酒屋に。拙んで居らるゝ所へ。忽ち一人
の道士来たり。其体を見るに凡人なるず。呂洞賓を名を
問ふ。道士吾は雲房先生と呼る者。終南山の鶴嶺
より絶り。汝が相を見るに仙骨あり。依て我より絶ふて。仙術を授
まんは如何とすゝめけれども。洞賓は迷ひて。未だ何とも
決せず。されど暫く酒屋の。頻で雲房は。酒屋の

子者よ酒を持来れ〳〵せ。彼洞賓を招きて。共よ酌かたり。稽醉を煙しけるに。雲房ぐ曰く。酒已よ足りと。亦飯をもふて食しける間。呂洞賓い醉よ堪かねて。側よ一睡をなしける。忽ち唐帝の勅使来りて。洞賓をよび迎へ。唐帝よ呈汝を召て。官よ即ち命ずとあり。急ぎ王宮へ参るべしとて。直よ伴ひて王殿へ至りける。帝い呂洞賓を郎署と云官よ即し。是より王よ事へて在るふ。帝の意よ叶ひて。遂く重練。秘閣。掾と云高官よ昇進し。宮中肩を並ぶる者なく。家も富貴と成り。女を娶り。婚姻よハ苦英を尽し。

程なく一子を儲け。三年の後又一女を産あり。されど一門繁昌ならるの王侯の如く。富栄耀ふよかなのハざるなく。ふの政事を執るの十余年。昭の仕官せしより。已よ五十年を経て。紅顔廣く。権勢を姫も者なして。陰〳〵王よ潜言しけるに。多ち罪を得て。官を剥ち。嶺表と云遠き島へ流罪よ定まれり。時熱毒の妻子。離別五よ歎き。悲しみ泣りあり。遂よ紅顔よ別生。朧変よ法を。独り孤島よ昨日の富貴。歎ふ引替て。今日の苦海ふる物あり。昔秋の歌

きよ彩色憔悴し。山時世を恨を身をかこち。今ハ拵身して
死ぬものと。海岸の岩の上より登り。已より海中へ没せると
思へど。愕然として夢醒。身ハ長安の酒店よりと見まで。
雲房ハ側より飯を含して居けるゆ様。呂洞賓ハ只枕もと
て凋果たるばかりなり。時より雲房の曰く。今の一睡の夢を
知きりや。富貴を汚て楽むゆ千年。遂よ流罪せらるまて
苦しむ。一切浮世の在さるハかくの如しと。扨よ仙道を僧し
て。不老不死の道を求めんと欲けれべ。呂洞賓ハ始て悟り。
雲房ゲ表より過ひ。即伴なれて終南山よ入遂よ仙客と成

ーと列仙伝より出てゐざりますが。なんと此世の主さまと云りのハ。高下ハ枢おさ。皆かくの如く。人間一生の苦楽ハ。山毎りより遠ひハない。一切夢でゐざります。人ゐも夢ゆ夢言も思ふも皆夢じや。人るといへども。そこあゞ。何時よりも同じ相でハない。人も禽獣も草木も。一切時〳〵刻〳〵より変化。生ずるものよ。能く業と結て固賢ドませ。夢ねでもなほ強の望より。仰山のびて居る。花でも昼ハ立派より開いてあつても。晩よハ凋るもあるぞ。又義もあり。人も出る裏と入る裏とハ。かきつてあるぞ。中〳〵業の結ねるものじや。亦写るもゆ

てみる内より。先の言葉ハ漸〳〵皆消る。言葉通り。いと言てゐよ波きぶいの音ハ段々消る。はとゝふ内まゐハ消る。八重潮さんとゐふて志ま八ね先より八重潮さんも消てゐる。お松さん。ないと居んでせぬ先より。お松さんゐ消ゆゐも知ぬ。牛も猫も。犬も猿も。皆消てゐる。主変ゐ又生まれも。生まれも。強ても居る。悪活変じや。又思ふゐも。滅後生と云て。先より思ふとおゐる。後の念よやぶ〳〵れて消る先ゐの思ひゐ生まれて来ると。書の念ゐ消る。又全の欲念ゐ盛んより生れると。子の念ゐ死んで志ます。是ゐ彼生死の迷

ひとりあるじゃ。お女中方もどふで衣物や。若りの会が生じ
ぢ〜遊しでなげりまするやう。おまけよ後者の会が生れま
さげな。又流行物でも。さんのいうさう。沢のう出来てくるあ
よ皆さび付。夫も矢張の滅後生で内者ります。私ども
や成ませねぞへ。さかく此会が骸を引出を因じゃ。ます人から
人へ引出す。因さへ前て居りや苦けまども。不出の因あら。
不孝不悌の因前でい。万物の霊体と成るのがむつかしいぞう
やらすると二度〜千〜苦の。お稼く相習をせるや成ませね。
此途のうい。今日迄絵〜ぐ。粥かく晩とこの不仕を。若身へ

立ゆりて眺てきろうじませ人者やようて人の因前さ
へ出をべ何とも人となるまい連ひまい苦因苦果悪因
悪果で佛の因を前が佛よ成よ連ひまい神よ成因前
ぞれ神よ成聖人若子の因前が聖人若子る様人を
若こ越ーすれば富人と無悪も手如く実行もなくして
人のあを欲しがを武い得んと思人属の人へ皆
盗人と為る又慢貪邪りんあ者い貧乏ある又乗悪で
あの命をろ者が扨て短命が瓜の夢よ花子かなしぬと
いのいけを理をいのさあで心ざりまを者ぬよ我〜の

ゆう寺で説教を聞て庚つて女房
よ云ゆう扨マア私ゲ説教を聞こ中よ牛を殺こたら必ず
牛よ成といそやつてこゲ此毎に連ひいきまい強て私
ハ佛を殺こたらなめて仏よ成ドやあろふと云こ性ドや
ゲ聞こ説教ハそこ通りあれども己ゲ身勝手かこ道理を
付ること皆此毎に連と取りまして丁度瓜の種蒔て茄
子を作ゆうふりのでこざりまして扨下の方乃落こ程の
義を見あぐこと知かこ晩とこの御仏皆迷ひの義を
見て落ついて居るのゲやるこ等を先だてこと云てハ落き

夫婦離別こと云てハおどろき。兄弟朋友ゲ死んざと
いふてハ驚き。親ゲ捨ねと云てハ驚き。家ゲ建ねと云てハ
おどろき。佛かるこいふてハ驚き。閻なと云ていおどろき。又
ぶりと見へい怒ても云たり。哀むかと云れば笑ても云こ
ま。色るかと見へば悩んでも云こり誘つてり私こ
たり。悪業義見て おそいまして居るのゲや。法ゲ聖人よ
義なこ云まこたゲ。あなこすゲよいなこゲ。元来迷ひ
見る種ゲなこ。こ種といふ。煩悩の迷をいふこ。あでゲざり
まして。聖人君子の方こへ。こ位よ素すと云て。一も無理

る望を仕給まれ上。来ざかるまへ結ゑ。未ざ開きぬるまへ
ハ恐是。義信義を背き驕ふるまをけ色で。困まりまをひ
公かもない。是を聖人よ愛なしとふさりのでゆく
教ゑる愛ばかりのるでハない。やっかく我〳〵ハおちこちち
らと四方八方へ強欲の強を蔓たり。怒の種蔓。哀の因。恐
の因。嫉の因。愚痴の因。貪欲の因。驚く。搦えでかりを
仕上るの故。サアそこの因ゞ一粒万倍よ成て。茅を切芸
出るゞ高朝。彼方でハ借取。此方の方でハ分義。向ふでハ
公事。喧嘩。彼愛の方でハ抱首縊。常よ驚の絶

間がない。是ゞ皆ゞ皆悪ゞ義じゃ。
「ゆるこをゞ。おのゞ羽風よおどろ紀て。ムこさりゞ村荘ゞ。
あの角力取ゞ。ゞ長ゞ仕ますのも。合ゞの不
祖法ゞハやゞされませぬ。頂るのハ皆こちゞの汚ゞ
じゃ。皆ゞ者の通りで。ゞ悪ゞ正ゞ。向ふゞハ自業
自得ゞ云て。皆ゞ元のゞ祖法ゞ。おのゞ羽風よおどろき
て。ムこさりゞ村ゞ。ゞ悪じゃ。ゞ奇よ
「ゞゞ。ゞへいかな」いつこう。月よ巻ゞ。ムなるん。
ゞいゞでゞります。ムと云ハゞムのゞで。月の元な

きべ。主人の如く。身は家来で来の如しや。心の主人が。身乃家来を考ふはあらうまへのみあれど。身の家来の方から。人の主人を考ふと云は。心で逆様じや。譬ば借家を貸て。本家をとられるといふはなるべきまでござります。本心を能覚智者なる人は。本心を以て身をはたらかす故。過はなけれども。小人凡夫は身を以て。心を考ひ者なるゆへ。身を故。狭ひだらけで。迷ひの夢が容易で覚ることは。夢を覚すん。神儒仏三教共。何まよおろかはなけれども。下根なる者智不学の輩は。主内心学ばず指が。一ぺんなる近道なる理りまして。心学は心法なきべ。学問の有無よは沿りません。又老若男女。智愚の差別もない。志一つが大事じや。志内情なる者は宜しい。老体よ及んでからはどうでも学めがぬるい。○童子教よも。四大日々衰。心神夜々暗。幼時不勤学。老後雖恨悔。尚無有所益と見えてはござります。人は第一無為を初れはなりませぬ。無為といつねなしと書ます。為なるとは互ひの身が。即今なるとふるまで。是は人の身でかりでは無い。一切万物有情無情は互ひ

「生る」事の門を約して世の中をのどかに暮らす。たとへ何ごとがふても。死の一つハ逃ハなし。故に孝子ハ
とさへ覚悟されば五倫の道ハおのづから正しうなるねば
ならぬ理じや。ゆゑなれば。とかくハ躰が。二十年も
も。何時とても有やうに思ふが故に。君も孝も貞女も。皆
朋友の道も。マアくハんどのくるに成て。互に牙張るだ
らけ。終に人道も信義も失ひます。又何程の悪人ゐても。
死後に悪名を残さるゝと。好悪いなしけれど。皆が全く
有る事の故に。今の悪が止て悔る。是の者の心迷も。

どふぞ未だ改しして善行も仕ようと思ひ。拭と。
未を的として。面倒の悪を止めぬ。即常といふ物が。
有やうにふからの。君を迎ひでゐざりまをゆう。
「生れて」死るものと知りながら。高らかに。
死るゝが然程厭ふ。元来ハ骸を求めて来ぬが宜
いのじや。然るに死ぬる世話もない。死よさへせよや。又
生まるゝせぬ。○古人の言に「死ハ生ヨリ来る。宜生畏若不
生何ニ依テカ有死」と云。ハ死ぬるといふハ生ざるが故
ゆゑ。生を畏て死を欲くといふ心で有ます。ゆゑに人乃

心と云ものハ。とかく生を惜び。死を厭めば。別て哀む。是を不覚とも。迷ひとも申すのじや。生ハ死の始とみて。生れぐふ胴ふまべ。始めから一心念注生の覚悟ハ。仕て来ておきでござります。衣の名を。掾戸太人のよまれるを。有よ。

「死ぬ。出て。注て。居る。是を見たり。と。祝ひよ。来る。逆様の世や。実よ。通りでござります。まよ。対てお伊勢様へ。参詣あまたると。必ず。詣でる。竜宮山へ。参ると云ハ。アリヤどふいふ訳でござります。全ハ。大神宮様ハ。死よ。火を。嫌ひなさるのじやげふ。又。竜宮山ハ。産火が。嫌ひじやと云シテ。ござれば。まぐ。那ち。生。死の二ッを。忌ぐの。間と。有ます。是も。先。那より。ほ。名のりでござります。骸の。生。死ハ。詣のりのじや。考てござりません。古。有よ

「人ハ。ほ。死よりも。なほ。ぐ。病ひ。死よりも。なほ。ぐ。念仏。なんと。面白ぐ。ござりませぬ。又。成。変よ。もつて。死を。嫌ふ。まぬ。ぐ。ます。て。気。の。人ぐ。えよ。離。夢を。祝ふ。て。「迷。医。より。近ひの。使ひ。来る。なら。ば。九十九。ぐ。いつ。まと。答へよと」云ます。た。者ハ。彼。の。者。ぬ。かぬ。那。て。「冠。ぐ。いつ。ぐ。使ひの。来。ば。ぐ。是。死。て。ぬ

おやとひ切てやゞ」と。云こゝ出しぎやゞ。年毫に子へ出し
てしかゝ。ねでこゝをあを。色の中へ皆は通りしやたと
七八十の婆ゝ。腰二ツ折まをなりて。手に数珠をひな
くり。南無ひとゝ仏ゝ。めいさまどふぞ救けたまへ。
婆ゝおもひとゝ。ひとゝまを。ぐ世を云て居たも。サア婆ゝ
汝ハ来ゝからおれを形むよ後て。今お色ゞ逃ひよ来て
やつゝと。仰まゝ。こらどふでこざりまゝ。ゝ。ゝ。ゝ三
年のところハどふぞ逃ひまをと。ひハなゝ。めいさま
のお向ひでゝ。ぞんなものゝやゝ。の為やけ逃ひゞ。地獄の

鬼であつゝなゝバ。三年ゝ年の延引変ゝ。是ゝ。ゝ。ゝ居おやと
云切て参りたかろうけれど。国府ゞ地獄の国でゝ。ゝ内へ来
てゝく喰ゞやゝ後て。三悪道より外ゝ。ゆくゝところがなの。
○或中条殿よ。家内ゝ古人ゝして。婆ゝさんよ為更
婦。ハ呂巻ひのゝ内でゝまゝたゞ。彼の婆ゝさんゞ。
毎日ゝく。北野の天満宮へ。朝参りを続されまを。変ゞ
家日ちと戻りもゝく。いつゝ変つての矣新まゝく嫁
毫ゝ。嫁ゝ向ひて「ハ、嫁女今ゝ向おまゝゝ」ゝ。孫の和
おゝ参りのゝざりまゝゝ。今日ハ嫁ゝいゝゞゝたよ

依て思さば是も拙く底うも遠かつたと見えまたもい
なう「ヨメ」何ぐそやうに。お蛙うらぢります「ゞさいな
途でおあるを。百文拾ふさよ伝て。まゞ蛙うて。ぶぜ
ようゝ底りまゝ「ヨメ」おゝいやゝの。百文伝のおあるぞの
やうにお蛙うござりますゝ。内よたんとぢざりますのふ。
「ゞ」サイナア百文の銭ハ。蛙ういと経のるゞぢぢざるぬゞ。
「ヨ」ゞ天満宮様へ日参をするふ依て。其内利益で手方
よ。百歳の寿命をあらへて。やるゝのぢ苦かと思へゞ。誠よ
蛙うてなるぬ「ヨ」まハぢ毛でぢざり

まだけまど。さてこれハ又案じるこゝろ有じませうまど。百
といふ字が。一日とよわます故。弟しやくふ一日の。内命ぞと
お告げでハないぞと。仙能をいろまたと云。母親ハ是を
聞。悔よ目の玉をくりつと三角にして。ヱヽそなた方ハ私
のこゝろをとかく逆さに成。悔くむまいと思つて。悔
ますやなこゝろ。なんよく接物の仕やうもみこゝ物じや。少づ
らつくいと。ぼやきくたまへ出らまたまへ。是ハ。どのハ
性合して居まさ。ぐ是くぐ悔。これの云ふ。一寸待てたる。
今こゝうが小婦さまかゝの下向でゝ。待を百又拾つこよ。就

て考へて見をば。是ハ全く天満宮様の内利益で。つまり
私しの信心するのを内存じ成こゝ方より百果の命を西へ
ゆくといふ。ほ告を下さつたかと思や。こゝう姉こゝてく
居まど居がかるう成こゝで。こゝう泣つこゝるのを。今嫁よ聞
付こゝれば。嫁がいふまハ。こゝがゆさば。百ハ一日と出ます
故。こゝ方の寿命ハ。一日よりないと云。ほ告でゝぞりま
ゆうこゝを。私しやこゝう拾ゲ立てくなこゝぬが。こゝが
みハまをなんと思やる。無拾じや。アレガやたのも
一理ハこゝまけまど。私しハ私しこゝけ案じが浅い

ゆへ。もてなされます。「ハヤアあなたハまづ
みどくいとして何あで」ムスコさやうじや。百文ハおろりと
云て。おあさのお命ハ。今も貧乏ないと存じま
ちと云〻。老母さんもあきまてまよハ初おくあらを
向て面白ものでさ仏。くといをれさと中吐でをまんが。老
ハ変して昔のうや。終所ものでハない。皆様〻我身のうや
じや。ゼンコクを別もやう面り。無分を忘きてと云ものハいくら何十
ト成ても。皆此如くでゐざりますころりよなりてからハ
やくのたゝぬ。ヨウジンなされませ。隙よ和漢洛よ源るの日

「人ノ貴賤トナク。識顔ニシテ知ラヌ物ハ死ナリ。是ヲ
シラヌヲ大愚人ト云。一生何ノ道ヲカ修セン。愚ナル
中ノ愚ナリ」とやてみまんがいのふもうむじやゐざりまを
ぬゝ。何が大るものと彼が大るものとハ。死よ越るたるハ
ない。名を尽すも貞女をたつるも。終まりけるも。
乱むも。骸あてのるじや。こを骸がなけりや。重も衣物も。
家も蔵も。金をもあるも妻も何も彼もいくぬ。スリヤ
骸ハど大切な宝いない。是い云とてもない。たゞ方も右方
も解うゆ存じのうじや。去てこりや何ハ外もあれ。死を

知らぬわたくしの大義人にあらず。主死を極るといふい全体何を中ちゝあでかざりませう。まうゆさび。絡〳〵吾魂の網うの和を知て来るのじゃ。拝仏の吾霊魂を知ぬといふい絡さび家の内ゝ居ふごゝ。ゝ内の主を云ぬゆうなるのじゃ。是ゝ付て○古人の法語ゝ曰「凡大道ニ入テ生死ヲ離ント思フ心ハ何物ゾ。只此心ノ源ヲ返リ見ル可シ。眼ニ色ヲ見耳ニ聲ヲ聞鼻ニ香ヲ臭ギ。舌ニ味ヒヲ嘗ム。之誰ガ恩力ゾヤ。無始ヨリ此恩ヲ受ナガラ。其主ヲモ知ラザルハ。譬ヘバ人ノ家ニ宿リテ。常且ニ育レ下ラ其家ノ主ニ對面モ爲ズ。又如何成人トモ知ラザルガ如シ」とあり。又奇ゝ

「かへりんゝよ。おのゝんゝハ何物ぞ。色をゝん耳を聞ゝよつけて。謀ゝ法構なる法語でハ味ひませぬう。此家主とゝふハ。眼ゝ有てハ色をゝん。耳ゝよあつてハ声を聞き。鼻ゝ嗅ぎ舌ゝ味ひ。身ゝ寒暖を知り意ゝ善悪邪正を弁ふ。此六根の神通を自由ゝつかひ。行住坐卧進止動静を自主ゝ活用ゝ為むる故ゝ。是を主人公と云。又此主人を本来無欲ゝして。人の物を欲しがらず。吾物を惜まず。首く

ものを指さし嗤らゞ。者るものを嫌しめゞ。生を怪んだ死を怨まゞ。目を閉まゝふして。万事を癒して滞なし。

扨も一切の不作は皆人の働きあるべ。何程の富貴も志を遂ずゝ。雖人形浄瑠璃の。彼人形の目を動き鼻を動うゝ。口を開き。舌を出し。人を。或は笑ひ。身の行住坐臥をするゝ。自由自在なるゝ。人形の所作の如くいんゆきども。全く他人の不作成る時自分。今も互の躰ゝ。人形の如く。自由自在なるゝ。所作よ似たきども。四変を人公と

ゝ。本心の使ひ人のみを扨ども。則人公ゝ。外なるを中ナ天御中主の命様で。夫那なるを天帝とゝます。まきゝ。

ゝ。躰ゝ。躰ゝ。躰ゝ。智恵で。躰ゝ。働て。躰ゝ。書ゝ。躰ゝ。財ゝ。躰ゝ。学ゝ。躰ゝ。不作よすると

ゝ。ゝ。玉しゝ。百達ひじや。元来躰ゝ。物とゝて。何ひとゝ

ありもせぬ物を。ギャツト生きて出たとゝ。一品たりとも。

持来物しゝ人ゝ。ゝ。ゝ。一切万物悪く天地の財宝

ゝ。ゝ。ゝ。財を御上様より万民の為よ出る能下さるのや。

又貴物のゝ。価扨ゝ。私の寿命ゝ。百まで居られぬ。

私一の妻子ゞ自中よりなくぬ。己の家業ゞ根ッから倦からぬ。私の器量ゞ別段よりあるまぬ。己の病気ゞ殆多よ治らぬ。其ゆゑ己ろ〻ぢまぬ。なほ己の愚ゞ己の戒ゞ云ふ。あるゆゑ中ゆゑ人間ぢまぬ。兼て人と云ふを識ゞ。人間の雪濯じや。

「終よ切く。所を己れ志めおきて。世を存ふる身を安けき。ゆゑ中互揃よ。迷ひの夏を覚ましてぞけ奇の心よ知て。世を安く暮したいあでゆ存ります。

心學道話初編巻之下

孔子在川上曰。逝者如斯夫不舍晝夜。と色ハ論語子罕の篇よ。見えてあるゆ言ゞゆゑ。凡道話よハ。古来より諸先生ゞ金玉の良説ハ溢たるなくゆ説を尽さるゆ故。今更拙き不学の者ゞ。見出すとゆふ説もゆざりませねども。其間愚者の説ハ少き故。ゆゑ和席より続き愚者の講話を拙くゆざりまゞ。尚ゆ語ゞ人間の不定なる者を川の流まくて後へ流しゞ。又独り止る者のなゆるを歎へて。皆人乃

昼夜となくうつり変り果て。終に戻らざる事。彼流水の如きから仰せられたる御言葉でござりました。そこで孟子も。水なる哉々々と仰られた。今から申て居る間も。線香の立つ如く消てをりますけれど。虚空の性気が。お互鼻から呼吸して居る息を考へてごらうじませ。引く息は出る息に流れ。出る息は引く息に流れしてあるによつて此体が生きてゐるもの。若や出しかけの間で引息がなかつてあらしバ。ソリヤお定りの死物じや。左すれば肝心の息主はどふにござりましやう。考へて御覧じませ。又体が

生てゐるならバ。死人でも眼もあるぞや。鼻も有。口も手まはある故なんぼも香ぎもし。ものもいひさうなものなれども。何ともいはね。云ぬはづじや。本から此体は死物じやもの。とかく小人凡夫は。肝心の活物を知らずして。只体の死物ばかりに目を付て。これしが生て居るとおもてありますゆへ。おまけに此体をこちらが持いたしてゐるは。皆逆さまでござります。此息主はお互に。夜はグウ〳〵寝て居ても出入の息あれば。昼夜の差別がなき故に。夜分じやとて一息も御休がない。去ぬる昔から去ぬる行末まで息

通しぢやゝ。シテおんようも考へぬかといへば。なのみも能く知る。眼耳鼻舌身意を能く守る。鼻なくして能臭ぐ。口なくして味を知る。耳なくして音聲を聞く。眼なくして色形を知る。まゝ。即ち。活主と云物ぢやゝ。息と云字は。自乃心と書て。則天の性じや。主性がお互の命と成て。鼻の門戸より。かと出て。みと入て。ざるに依て。神道よりて。鼻通しと云。又如と入て来とお出まし。なさる。は通ひの鼻は内外無して。何を始め。いつを終りとしも限りは

なし。依て是を無量寿とも。本性とも。自性とも。本神とも。本来とも。天地の神気とも。本来面目とも。名はさまくよりて有ますれど。本来は一つぞうりますす。ちかくは実名がたんと。ものが違ふやうにおもひます。

名は迷ふ。人のこゝろは思うさよ。咲てちりぬ。おぼ牡丹緑なる程おちぎと云も。牡丹緑といふも。更にかりは無けれど。花二種の名と合ま。亦所よりますと。是を引ても。又なか性とも。いひまたさうなもりけいと。

たら。ゑの引は美色半分と赤色半分とのゑのようつて。
は牡丹餅も手通り美を彩半分と赤豆半分とは
ぶーとけさてよたとへて。ほんの引とは。又手加減と
言ハ。惣体寄進をする事を彩むよ。手加減を申ますと。平生
別で。ものつくようを第一付る所もあれば。かひ和もある。
又たまで付ずよ。断る所もぢざります。今牡丹餅が赤
豆のよは付和もあるが。ある和もある。ふうの貧扱ば。
たまで赤豆のつのね変も出来る。伝て事加減と表
ようのでぢざりますげふ。そこでほど餅の名と云ぬ人が。

吟度おとふ皆和ぬ。遠ふようよ思ひます。実よ事如く。
彼の和ぬも。色く美名がをまたを。得ないのの
遠ふてハなのかと。迷て人もをまーようが。やとりかとり
をぢざりませぬ

「りの者も和ようて変るなり。泥死の声ハ伊勢の涙荻。
然しさようなる。口舌嘲いさておいて。どかく人世の止まら
ざるをハ。彼流のの如くあれど。川の流を臨んでを。
寿命の縮まるを吟め。泡の浮ぶを見ても。人身乃
化あるを。種やを敵の言を吟ても無益をせむる

仏と。云ことが承りませぬ。亀山院の御製に。
「幾程か。違へてん山ざくら花より脆き命とおもふ人ハ。
花の散かゝるとみても軈で我身の散安きをしらざるを知
まことの歳月。○忠臣蔵の四段目に生らるゝ花よりも。
生る人こそ桜花紅葉とやしてゐますが。生る花によりて
ハ。随分七日や十日ハ。変らずにすんでも持ますが。生る
人こそうろたへぬ程で。親ハ子に後れて悲しみ。子ハ親を
送りて嘆き。妻の夫を失ふて過つもあり。夫の妻に別
れ悲ふるもあり。杖と頼みし孫を死なせて。腸を断翁も

あり。能く云へバ。親子兄弟夫婦の間。さながら船の乗合
の如く。とかく去る内に別れてしまふに成。ま違ハござりま
せぬ。喩へバ四条河原の夕涼み。宵の内ハ是や此ゆくも
還るも。蟻の集るが如く。東西南北へ押合へし合。跡ハ氷水ありまに
西瓜店の夥しく。繁じて商ひ店ハ我一とあらそひて荘厳
立。料理店も出入客の絶間もなく。又灯し火の輝くありさま
云ばかりなし。夜終ら群る人ハ多けれど。夜明てみれ
バ。瓜の皮竹の皮紙屑ばかりで跡方もなし。今も
其如く。夫に妻に親に子に。互に頼りに仕合ふたるも。

暫の間死ぬ時は別くさよ成て。手足萎て。歯嘆の所のはやら。後悔の外の皮やら。恵癖の紙屑やらだ。

扨方もなく。謀よとの云いのしやうざんしませぬう。

脇よ永観往生講式云ク「身心劬労無有安時何況朝開榮華暮隨無常之風宵翫明月曙隱別離之雲一生是風前之燭万事皆春夜之夢豈只安然眠床上無常忽至何得逃」。何と強よで。結構かお術しでいたざりませぬう。

是を書てき和らげます。身心苦労して安き時あるよなー。何でいそんや物よ業死を平生。

無辜の風よ清ふ。宵よ月を破びー人も。曙よ別離の雲よかくる。一生は是風の前の燭火。万事皆春の夢。豈只安然眠床上無常忽至何得逃。

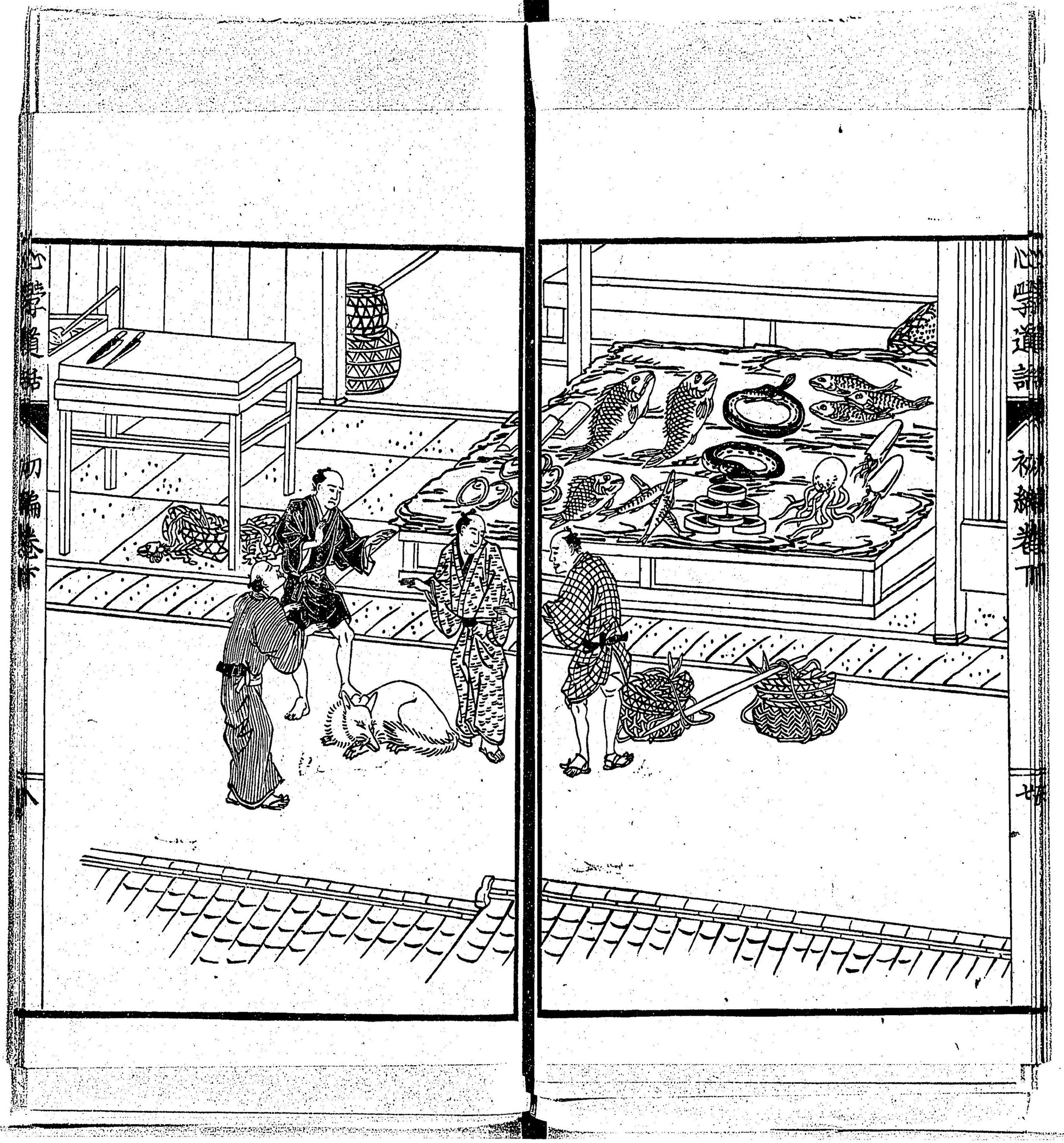
然して床の上よ眠らんや。無辜忽ち到りなど。何で逃るるを得ん。と云ひでゐますが。山逃るーちを行んよ付まで。

壁平の猫と云ぐ内ざりました。○或時一足の狐ぐ。奥の猫を咬ふと思て。奥座の表へ来てうと変ぐ美さうな後猫ぐ来て。

か捨てあるまーと。そこで咬よかと思ふ内よ。向ふかー四人連で人ぐ来る。狐まを見て。いつこまーちまーどやー。脱よ逃やうかと思ふさぐ。待てーちーぐ。外の狐ぐ

来て咎をするよ違ひハない。何ハ悪もあき。先皆く口安で。孫
さ振をして居ます。人ガ性て去まふたらしてやろふと。
ちざと宗旨して居る所へ。彼四人の若ガもとへ来て。一
人のふまハ。ちーハ蛸て狐の尾ガ。ほーいと云て居さガ。
蛸ひのるもどやといふて切ふとする。狐是を笑て云ふハ。
なんじやちーの尾ガかーいと云ふ。是ハ困ってるもどや。然
し尾ハ切らきても。猿ちさハ咎へる。マア能いちいと。孫さ
振りして居ると。又を人の云ハ。ちーハ日比。狐の耳を得
ない拘じやと云ふてあるガ。稀ひのるもどやと云て。切ってか

らうとする。狐又耳を笑て。おいつも耳ガわーい。狐義るも
を云をる。然し耳ガあるとても。はるちさハ咎へねるもハあい。
マア是もよいちと。蛸をゆるして孫てあると。又を人ガ
しハ狐の牙ガほーい。狐の牙でおを脅とあんでも脅きる
げあ。蛸ひのるもどやといふ。狐大きる驚ちさ。尾を切れ耳を
切きても。猿ちさハ咎へると云ふさガ。今牙を云きちや。
咎ふるもガむつかしいガ。待てくそれも一本や二本位切ら
きても。まんざら咎へねるもあるまいと。観念してあると。
沢の一人ガ。おあくさハ尾や耳や牙をほーがるけきど。


心學道話 初編卷下
心學道話 初編卷下

こゝへ狐の首がのぞみじゃ。首さへあればなんでも自由じゃ。どレ切まゝゆうと云。是を守て狐ハ南無三ぶつくり。今首を切れちゃ。コリヤたまらぬと。既よ逃ゆうと考こう。爰うかなたぬ。人がぐるりよりおまきふぐしてハならぬと。各くよりてかゝつて。たゞき殺して志まふことと云。鬱でいざりまたがなんと面白い狐へでゝまゝゆうが。是ハ金縛。何をゝさゝぬでいざりまゝゆうか。凡小人凡夫ゝゆ者ハ。只眼の前の利欲よ迷ひ。えげしき服装の考えをきんても。爰ゆのゆゝも見えず。考よ覚悟の心もなく。

一生を徒よ。明し暮して。強よ怪綸よ係めば。心暮きゞ。こゝへ。切先も見来ふく。そを時。初て先死を。後悔をると云心を。いくさ物でいざります。花山院の御詠よ。

法くと明し暮して年月を。強よハいのゞかぞへあすべき。

つくゝと明し暮すゝハ。只徒らよ。年月を送りしゆを云ひ下の心いゆうよ徒て。死ぬるゆやらんと案じゆるゆて。一生を空しく暮す。故よ。終末ゞ。思ひ来ない と云ゆゝ。故よ。思ぎて。我が心を求めよとゝ。考とんえまたゞ。皆後よ後悔を志ますゆゝ。故此様への訳を。

あらくやまこゝろ。脇より四人連と云へ。人と生まれたれば。生の若老若病者死者とて。四つの苦しみあるよ。又奥の板とさと云へ。金銀財宝衣服諸道具棚の紙宝と云へ。猫と云へ。迷ひの小人凡夫よたとへ。空振して居る。二十年三十年四十年。乃至七八十年の間。生長たる人の身の。肝心の我本心を求るのみなく。只明暮衣食住の三つと。ほしい程まよ。貪欲心苦して。既に一生を空く送るよ。尾を切と云。尾へ目下と云意で。庭へ入へ出入の者棚の死ぬるよ。尾へ再へ再へと云て。

釈迦井縁者。或へ友達おどの死よ。あたたへ。牙と云と。親子兄弟姉妹。首と云へ。我身の死病よ。ゆゝ付しふ。既に人生まれて。生老病死の四苦へ。はなれるよへ成りませぬ。生まれたら死あるべき。又病も多ありもあります。又老ぬまべ老苦として。人幼らべ身自空のなくね。苦くしてあり。人皆を四つ乃苦るしこゝろへ初りあるから。只欲しい惜しい。恰たい衣こい。持こいと云。金銀財宝の奥の板口さよ句引さ。まて。先ギャット生まれ。乃至七八十までの一生をこゝろ

と言葉をして。屋や車の座入出入のすの。或ハ報恩朋友の。死ぬるとなんても。只を時だかりで。身分の無尊よ気も付ば。又牙の如く掛つる。親子兄弟まあ掛の。勢利よ度く出来ふても。主商売ハ難けども。さかく人の噂を欲よ貪慾ー。又まあの色慾よ執念深く。遠き所の事ども。商売して。続らよ月日を送る間まハ。孫よ、我身の弘病よ。ちと付し時。嫁よあたてたちく。弱げけ。こちく人お手度。又ハまだ。或ハ方位家相寿の方位よ迷ひて。あちらがいうぬのこちらぐ悪いなど。うろたゆるぐよ。後悔でござりまし。やうがな。三年まあよ見ぐ去きたらよいものを。イヤあの悔がいきてあてくれたら根と。先まの鉄炮火うよ焼て。ほまうふ。衣物やたをを。焼よおもしやて。ほがるやうありのじや。今ぬそんな悪癖を。並べたて。目をむき。歯を噛ちぐり。七転八倒して。の報後悔ちく和が。すんで仕業と。治の苦じや。ちかへしい成りませぬ。大方ハかやうなるで。死んで去まふのじや。つやでもおうでも。後付先へ。地獄の釜こげよ。ちるよ。さバさら乃

付ゆうぐわざりませぬ。何と惜いものじやわざりませぬう。
是からはんりや。遠よ金敷の方が。塔でありますナ古家よ。
「いろづくよるこにらやなげのれん。夏がく紅葉の名誉のたら。
関防内侍の哥よ

「春の夜乃。夢ばかりなる手枕よ。甲斐なくたてん名こそ惜され。
是ハ本意なきれども。そこのふきさま様をヤハ。同じ恋で。先
春の夜の夢といへこうく夏へのけての。雄叔といふのを。
夏乃夜叔とハ違ふて。殊よみかい。そこで手枕といふて。
実面よ枕をして。寝入るもないとふ心が。能てみろました。

あざ稚さう寝ぬかと思ふ内よ。夏叔となるやうあおで。
人の寿命も夢の如く。生れさかと云内よ。光陰矢の如く
で。十年や二十年。乃至ゆ十年。一生のるといふのハ。夏
の雄の叔の如く。年ゑさすれハ二十年。三十年。あのるを。
立ちつて思ふてゐらうじませ。花鳥や花嫁といそれて
居と内分ハ。ツイきのふの夏乃。地でゐざりまやうがな。
スリヤ是雄ハるのハない。皆しの夏じやもそれで。珍夏
ばうとあつて。何を強るも。彼をそるも。行住坐臥見聞
覚知の御さ。苦も楽も皆夏でありじやよ。仮て。皆底が

消て来る。又甲斐なく立んと名を惜れとも。一休の前よ。

「世の中へ咎ふてたてと捨て起て。さて千後へ死るだかりぞ。前条もやはり通り。学べい島を拵あげ。こを本心と初らぬ求めばして。辯だかりの世話よ欲張たり。あせつり。一生涯の功もなしよ。死ではは仕舞てい。打角万物の霊長と。生れて益もないるでいけざりませぬ。既よつまぐ仲の四十九よも○老来りて初て道を紛ぜんとまつるあかき。古を塚多くい是少年の人ありは。はつはぐるよ病を受て。たちまちに世を去んとする時こそ。始て過ある

かくのあやまれるなきい去ふを化のるよ形ぞ。速よらべるをゆるくし。緩くすべきるを急ぎて。過するのくやし記あり。を時くゆるもかひあんや。人い只無常の月よせまりぬるを。ひまもしと急て。法がのるも志るまずきありと云て。去てこれば。互拵よ。実よあやうひ月のよでぬぎりませぬ。世中よ速よすべるをゆるく」。緩くすべるを急ぐとてるまれば。速よすべるとへ。無急ぐとるのでいそぐとい自己の本心を。明かよ志るをいふるあ

でござります。又ゆくすべきこゝハ。世のすぎゐひのるゝじゃ。兎角ハ皆遅よりやすひ。○大經ニモ。世人薄俗ニシテ。共ニ不急ノ事ヲ爭フと。況て有もはゞ意でござります。○大學ニ曰。其本乱而末治者否矣。其所厚者薄而。其所薄者厚未之有也。仲んの君ハ本心を求むるとゐふハ。全く手本を失いたる故のるでござります。伝てゐを陰約するゐハ。情く若い内でなけまべ。老ハ及んでかゝハ手後きとゐります。去ながゝ。吾文拙なる。家業ハ勿論。大切ゐ勤めるやうなゝね。各おきども。ゆ家業とゐふ物ハ。とかく強欲ゲんをすて。イラくと心ゆ閑忙て。都かゐ寄らるべ成ゝねるゐと。急ぐ繁のるゐふ関係したり。仕ます事べ。中まハ人の難義もかゝり易ば。愁もいとゝも厭ひ易く。我田へゐを引こまうとして。強欲を發しまハ。苦へべ十年掛て。組ゐてゐいるゐを。八年で仕上ゐと思ひ。又八年の内ゐれば。三年の望を立る。三年あれば。一年でゐも出ゐと急ぐ。情欲のいとゝ。ゆ一ゐと云ゐのハ。彼方を思ひ此方を念ひ。朝ゝ晩

とのあるよ。炭竈の煙りにモヤ〳〵と差かゝり入智り。爰と成り現と成り。何ぞでも出て来る。主欲念を八億四千の念ともヤ〳〵で有て。実よ強るゞない。金の念ひゞ滅ると。雪よ夜物の念ゞ生れてくる。家の念ゞ死ぬると。又是其の念ゞ生れて来る。妻を念ふてゐる間い。母乃念いない。楽〳〵この念の間い。苦〳〵この念もない。おゝ思い扉でも。お菓子の二階で。手をたゝいてゆざるゐ。昼夜の念ゞかりゞやけきど。已よ情る隙をとりるゞ寂後。ちや楽〳〵この金い浄土て。チヤント苦〳〵みの金と入変るゝゝで

かゝつと。今日い初手の昼おくゝい。縁わど苦ひるゝ〳〵ふよつて。ゆ情るの捧ゞふ仕事。寄んざゝ間の貌尾へ。どふゞやあらふかぞと。自業自得のるを。紀の知るゝ何ぞのゆうよ昼ふ涙惜さを。解う考へて浅じませ。おゝ通り。人の忘念といふ物い。一時よ意ふつて愛る物でい方ざりませぬ。可色と昼ふゝ念ゞ止む所かゝ。悩いと云念ゞ起り。嬉しいと昼ふ念ゞ尽ると。怒いと云念ゞ変り。ふゝゝゝゲ湧むと。安たいよ移り。陰ゝゝゲ衣ゝいよ成り。男の念ひ又女の昼ひ。福人の昼ひ貧人の念ひ。金儲け

の念ひ。換はる時の念ひ。或ひハ博識の念ひ。貴人の思ひ。
小人の念ひ。主人の念ひ。家内の思ひ。手代の恠ひる。僕の
恵ひ。下女の怪ひ。出入の者の恵ひ。東ひハ夜ハ暑きを思
ひ。冬ハ寒きを思ひ。旅まてハ故里を念ひ。朝の思ひよ
ひ。夜の念ひ晩の念ひ。今日の念ひ明日の念ひ。亦ハ一月
先の恵ひ。二年三年。乃至ハ年ナ年末の恵ひ。子孫の
末を恵ふかんと。深山る念でハござりませぬ。マア一寸
いふても是ハ実ハ。実ハ毎日く埃の立ゆうよ。せんぐりく
溜て来る物じや。是を唯心の所造。業滅後生とゆて。

一切の念ハ。唯心より造るのでござりまする。又身の業も
苦悪ともふ。皆心の念から起ると云ふを。知り明らか
ねで成ませぬ。盗心多くて。人のあを動る例ハない。欲い
くの念ゲ重なり積つて来る所よ。終よ盗を出ますする
のじや。涙をこぼしてから。後で喜いハない。心よ喜い念ゲ
通るよ伝て。眼から涙ゲ出て出る。眼ハ精神之窓と
有り。誠よ云通りじや。先額よ青筋を立てかゝ後よ。腹
を立る人ハ多ひゆうなあで。一切罪の所作ハ心の念かゝ
でござりまするがなアノ壬生狂言の面とりハあを

今日我々ぐ会を外へ出してんせさあどや。おひは内よあまべ。色外よ現するとかて。身の不仕合ハ皆。己よりしたひまを。彼の唯心の本ハ一でござります。お互ひよ人ハ貴ひ物じやよ他て。主本心の信さへ守まべ。自分々人の人たる所ハ。約へまするよ市ひハないぐ。然ーあ朝ようア所の。主沢山ふ会ハ。此辨よ一ないぐ仕辺でもあるのかと。思ふ方もあらうぐ。此辨ハさやうな会や。心ハかしもないぐ。又此ふさい辨よ。さう沢山仕てもさうか参をない。そんなら主会ひハ。どこかぐ出て来るとおつしやらうぐ。

どなたもよう考てごらうじませ。先金を見んせよハ。差面つて欲しい金の念ハふかつさぐ。沢山金を見てさあから。俄よ欲しいなつて。あの金ぐあつたらあまるかて。これもかつてと。思想ぐ出来る。又門を直つても。別ふを見ね先よハあんな暗を吾女房よ拾て。二世も三世も。差したらと思ふ。念ハなかつさけまど。風と一目見んと取ろ。別ふの縁よ解て。係合ぐ費るのじやござりませぬう。見つてお女中方ハ。門へお出まを。やと。沢山飛ぐ殖ます。あの人の衣物ぐよいのぴ人乃

常ゞ為世じやの。イヤ差物ゞ輝かのと。お獲よ念ゞ出来
まゝやうがな。門へ出ぬ先よ。未ざ手を云ハなく。夫
ゞ則ち極楽じや。去ル日をまゝげて出るゞ妄後。言う
眼よちらく。地獄の国ゞ出来てくるスリヤ皆諸縁う
念ひを化るのじや。諸縁ゞなけねば。何の念もなく。よ
しや諸縁よ触て。欲い求ゝ心の望合さへ無けねば。善
悪共よ見れど見ゝなり。皆ゞ皆さ絵で。諸よ変る念ゞ
なかつゝるのあ生べ。夫ゞ見六根清浄と云あでござり
ます。トハ云りの。小人なハ。一意見聞ゝなれば。おゝよ念

十念と。夫からそれへ。恰様の巣を張さやうよ。念を沢山
掛て。眼をむいたりきざつゝり。始つゝりゝる有よ。八第四
千の地獄ゞ。一時よ出来てきて。選ひよまひを。法を重
ねるゞ少へ。六根不清浄とある。然し我くい日ゝ教くみ。
諸縁よ触ますへよ。さまゞくの念も変りまゝども。
主数る心ゞ有生べ。亦未ざ変ゝぬ有ゞ。みさうあもれ
ぎや。主数つて変ゝぬ先ハどんな物でござりまゝや。
見て見ぬ先ハ無念じや。皆てきてぬ先ハ無心じや。念
ふて念をぬ先ハ無一物じや。又見ぬ心より一切を見る。

少ねてろより。万の言葉を少分る。亦思ねんよと。
善悪邪正を能とける。スリヤ是ん心も。是ぬ先ゞ
少さ心も。少ぬ先ゞあり。念さ心も。念さぬ先ゞえお
や。色念色心の本佛ハ。不思議を以て体とするとやて
ゐます。たつさ一ツの本体を。知ゝたいだゝかり
よ。釈迦も老子も。荘子も孔子も。皆外古人から乃
先賢方ゞ色ゝ。いろく。さまゝ。教へて。方便をめゞゝ。教へて。
る依て実実知る拘ることて。色より外ハ。ござりませぬ。
心外のものハ。何を知しかとて。皆有相じゃ。一ツゞ。

三教の根元。名家の奥儀。諸道諸法の根本。色も天地
の大本でござります。一ツさへ会得ゞ出来ましたら。
造化の神理を始め。一神教でゐます。百神教でゐます。
耶蘇教でゐます。何も不思議とてハ無い。悉く。譯
もない。一所をよくゝ見付るゞ。大悟の法眼を開くと云
ねで。一ツを知るゞ。悟ると学ると色学ると。ねで
ござります。然し一ツ。是ん。初心の方ゝでハ。一寸譯ら
ないけれど。辛抱仕て呼下されませ。只本心じゃ
くゝじゃ。本心ゞ本来ばかりと云ことて。御でもそ

心の欲を。貪りてお嘶やさまやりませぬ。主和心とふ物ハ。塗へていそぐ。人が泥山金を儲け。富家成ても。別ようらやましいと思ふ。又求めたいと云念ない故よ。換しても貧てをいると。又貧乏なと思ふ心もない。或ハ楽しこと。貪む心がないが故よ。又貧む念ひもない。亦生をよろこぶ故よ。死を恐ぬ。又愛ふを悲ぶ故へよ。離別として哀うもせぬ。或ひハ人を恨この恋ぶ心がない故よ。又人が憎まうとも。妬まうとも思ふ事ぶ心もない。又悪を嫌ふて善をもすのね。

亦地獄を造ぶ故よ。善て極楽をねがひもせぬ。又態と邪を嫌ふでも善く。強て正を求めぶ。又男女老若へ渡りて。一ツ差別もない。又方角の差別を建ぬ故よ。常を思ふあんじもない。偏て日の吉凶も撰まず。鬼門金神冥劫報と云事なかしは。思ふ心もない。そんな事一切もして。何もないといふ。先制ようや無り。解る法縁よ依て。多々ちゝ心を生ず。善悪邪正を能知る。善分別して能一切を分別ス。七情よ染ぶして。能七情よ渡る。六根善して。

人間香ぶ味ひ人間貪婪を知り思量分別す。又色彩うして数々の色を形ち彩して万物を産出し成ハ
ま万物を育て。一切衆生を養ふて碁よきせぬ。ふんと
石見陽名。化りのでハうざりませぬう。凡世よ何ぐ底白い。
かゞ強構ふてる。山紙物よおめよかゝる程多い学又
ハうざりませぬ。強てる字の穿鑿も及ぶぬ。仮てど
なくも本稟ねこゞと。情々けん学をきれて。ま本心
の身よ。お身ひ様されて流ゞませ。是わど慢大ある。
大結りのハうざりますせぬゞ。彼是油断をして居り

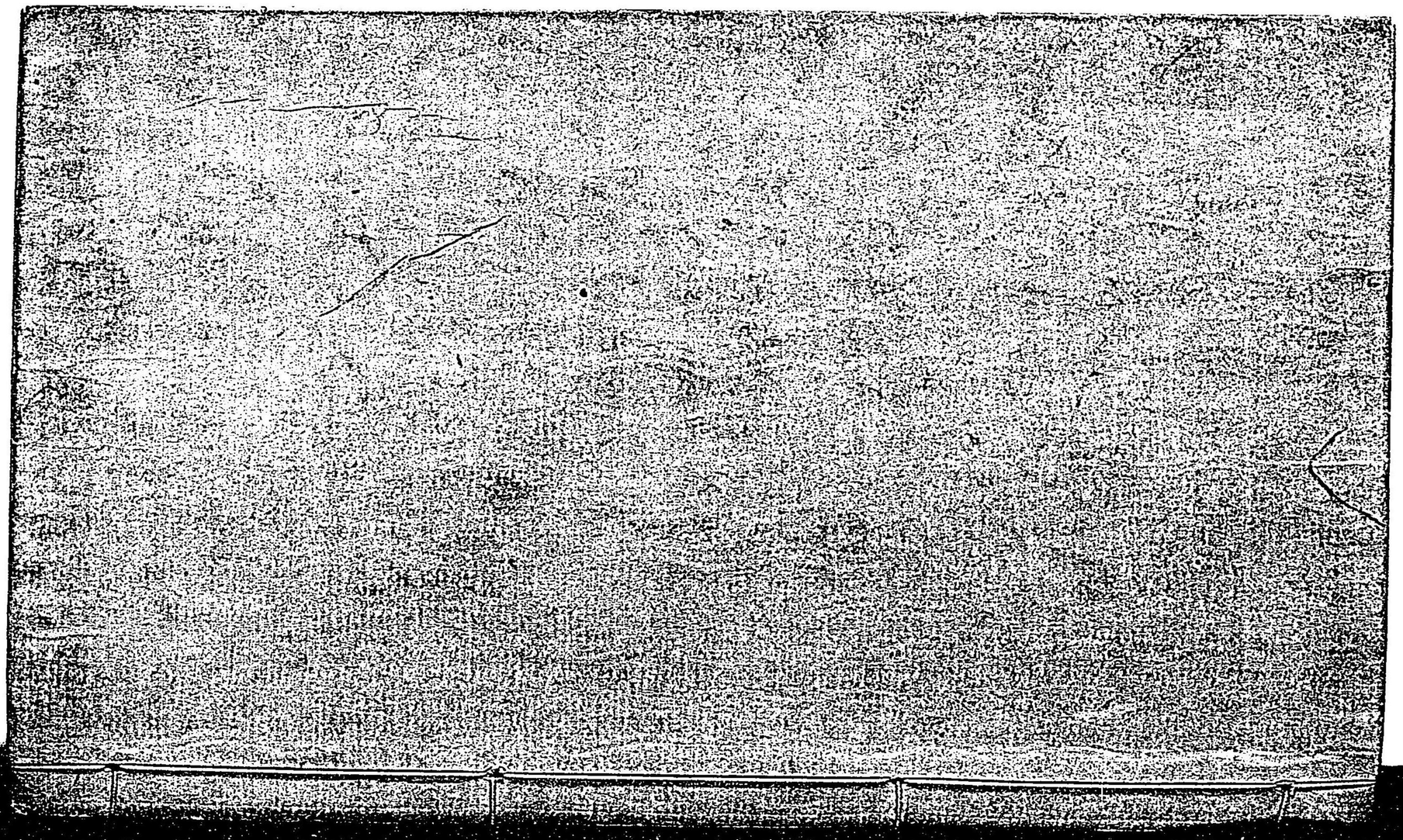
ますゝ。ゼ前刻ゝ狐のごとく。尾を切ゝ毛。耳を切
ゝる内よ。牙ゝ居りて首ゝ来ていうわど後悔
ゝる。後へ還ゝぬゆへ。大ゝをよゝく思ひ識て。先
行心の求むべき。吾が本心を明かす。善を常
ゝ新ゞ。井一ハ天翔の御仁恵。第よ國君をゝけれゞ。
人の人たる。又常五倫の道を忘れおりて。牙ゝ
意の。奥の股傷を望むが宜しい。サスリヤ何時首ゝな
つゝも。迎ゝれゞて。ゝる覚悟ゞ。板よ。善よ
常を覚悟せよと云強へでゝ。仮てどゝも此

心学道話初篇下の巻終

心学(シンガク)を。ご(ゴ)べん(ベンキヤウ)強成されませ。

明治十七年十一月三日 出版御届
同 年十二月廿日 刻成

定價十五錢

著述兼出版人 京都府平民 守本恵觀 上京區第廿三組亀屋町廿七番戸

賣弘所 京都三條通寺町西入北側 杉本甚助